

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 110 号

平成 23 年 6 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960)

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「ミス・ローラ・J・モーク その信仰と生涯」
(昭和 39 年・小石川白山教会・月曜会発行) より (1)

ミス・ローラ・モーク (1886-1962) 略歴

1886 年 5 月 20 日、アメリカ合衆国オクラホマ州ドーバーで生まれた。

1910 年キングフィッシャー・カレッジ卒業。

1912-14 年 シカゴに行き、ディアコネス・トレーニング・スクール(婦人社会事業学校)、ムーディ聖書学院で学んだ。

1914 年アメリカ福音教会海外伝道局の任命を受けて、来日。

1915-1952 まで、東京伝道女学校で教えた。同校は、後に東京聖書学校、さらに東京聖經女学院と改称。

来日以来一貫して、日本基督教団小石川白山教会(旧小石川福音協会)宣教師として、39 年間、キリスト教伝道に携わった。

白山教会では、バイブルクラスを持ち、次のような人々がモーク先生の教えを受けた。

小西芳之助、粟野政男、篠崎茂穂、広野捨二郎、長谷川新吉、天野秀夫、長谷川進一、田中実、藤田昌直、石館守三、小牧政治、奥田貞一、沢政夫、内藤与三郎、などがいた。

東京高等師範学校、東京外国語大学、早稲田大学、日本大学、国鉄の聖書研究会などで、聖書研究会を立ち上げた。

太平洋戦争中、1942年9月16日から1945年8月22日まで、米国に帰ることをせず、東京で収容所生活を送った。

1945年夏、戦争終結後も、この1年こそ日米親善のかけ橋にと日本にとどまった。

1946-47年アメリカに戻り、全米各地の講演会で、日本の窮状を訴えた。

1947-53年、再来日し、宣教活動を続けた。

1953年7月、任期を終え、帰国、オクラホマ州ドーバーの家で、静かな祈りの生活をした。

1962(昭和37年)9月8日 召天。

小西芳之助、石館守三は、学生時代から、モーク先生に聖書を教わった。

(以下、最初は、小西芳之助著『主の御名を呼ぶ』から、モーク先生に関する記事を掲載する。)

Just Forty Years

For the first time I came to the Koishikawa Hakusan Church in Oct., 1917 to attend Miss Mauk's Bible Class. It is just forty years from that day.

The first six years I was a student. The following twenty-four years I worked in a company.

The last these ten years I have been a minister of a church. Now behold, our commonwealth is in heaven(Phil. 3:20). By grace I am what I am, I can not but thank God for His guidance.

(Oct ' 10)

満40年

大正6年10月、私は小石川白山教会に行ったのは、モーク先生のバイブルクラスに出席するためであった。それから、丁度、40年にあたる。

最初の6年間は学生であった。続く24年間は会社で働いた。最後のこの10年間は教会の牧師をしている。

今や、私たちの国籍は天にある。私のかくあるのは、恵みによる。神のお導きに感謝せざるを得ない。

(昭和32年10月)

Miss Laura Mauk

Miss Mauk, my teacher of the English Bible Class, was born on May 20, 1886 in America and died on Sept. 18, 1962 at Dover, Oklahoma. She came to Japan in 1914 as a missionary and returned to her native country in 1953.

During her stay in this country of 39 years, she taught in a seminary of the Evangelical Association and had some English Bible Classes. I was a member of her Bible Class at the Hakusan Church from 1917 to 1923.

She was truly a pilgrim to Heaven. By her life, she witnessed to the eternal life which Jesus Christ gives.

Oh, I wish to follow her !

(Oct., 1962)

ローラ・モーク先生

モーク先生（英語バイブルクラスの私の先生）は、明治 19 年（1886）米国でお生まれになり、昭和 37 年（1962）9 月 18 日、オクラホマ州のドーバーでお亡くなりになった。先生は、大正 3 年（1914）に日本に宣教師として来られ、昭和 28 年（1953）に故郷にお帰りになった。

先生の 39 年間の日本ご滞在中は、福音教会の神学校でお教えになり、かつ、いくつかの英語バイブルクラスを持っておられた。私は、白山教会バイブルクラスの会員として、大正 6～12 年の間お世話になった。

先生は、誠に、天国への旅人であられた。先生のご生涯をもって、イエスが下される永遠の生命を証しなされた。

私は、先生に従いたいと思う。

（昭和 37 年 10 月）

A Letter from American Missionary,
Miss Laura Mauk to Me

“ Study to show thyself approved unto God, a workman that needeth not to be ashamed, rightly dividing the word of truth ”

(Tim. 2:15)

This book contains all the Truth any one needs to live , to die, to pass into the Eternal Life by. God ' s Truth is sufficient but we must study to get it, open our minds to receive it, and then obey it.

Especially is the study of this “ Book of Book ” important for every Preacher. May you study the Bible, more than books about the Bible. Let God teach you first-hand. He is the best Teacher for you.

God bless and uses you,

Laura Mauk (Jan., 1978)

米国宣教師ミス・ローラ・モークからの手紙

小西芳之助様

テモテ前書 2 章 15 節

この本は、すべての人が生きるために、死ねるために、永遠の生命に入るために、必要すべての真理を持っている。神の真理は完全であるが、我らはそれを受けるために、勉強せねばならぬ。また、それを受けるために、心を開かねばならぬ。特に、すべての伝道者にとって、「本の中の本」と言われるこの聖書の勉強は重要である。私は祈る。あなたが聖書に関する本よりも、聖書そのものを勉強せられんことを。神が直接あなたを教え給わんことを。神自身があなたの最良の教師です。

神があなたを祝福給わんことを。

1950 年 9 月 13 日

ローラ・モークより (昭和 53 年 1 月)

「ミス・ローラ・J・モーク その信仰と生涯」

(昭和39年・小石川白山教会・月曜会発行)より

偉大な人

ローラ・モーク (Laura J. Mauk) 先生は、1914年(大正3年)より1953年(昭和28年)隠退のときまで、日本に遣わされた宣教師としてその輝かしい生涯をもたれた。この充実した生涯の前と後に、日の出前の期間と落陽の期間があった。モーク先生は、彼女の愛しまつる主イエス・キリストのごとく、その一生をおのれのものではなく、神の栄光と他の人のために献げつくしたのである。もっと正確な言い方をすれば、同先生のために書かれた同女史の属する教団の印刷物のごとく「彼女は、キリスト教会の大目的のために自分自身を惜しみなく与えた」人である。

母上

ミス・モークは、宣教師として日本に来てからのち、若い日本の学生たちに話される説話の中で、彼女の母上について語るとき、その敬虔な眼眸(めとひとみ)は一段と輝いて見えた。ミス・モークは、あまりものを書くということをしなかった。手紙はよく書かれたが、雑誌や新聞にもものを書くといったタイプの人ではなかった。それだけにこの一文は貴重である。

母の日(ミス・モークの手紙)

主筆はアメリカにおいて守られている母の日について何か書くようにとのことでした。たぶんこれは私がアメリカにおいて、私の母と共に如何に過ごしたかを語るようにとのことであろうと思います。

わたしたち子供が齢を取るとともに感ずることは、私たちは母に対してもっともっと感謝し、母の与えられたことを喜ぶべきであるということです。そしてこの日、すなわち私たちの母への愛と感謝を示すよき機会を与えるこの母の日を、いかにもして、よりよく意

義有らしめたいというのが、私ども子供らの願いなのであります。

私は信じます。どなたも皆同じ愛と感謝の思いをもたれるであろうということを。然し事實はそれをいかにして示すかに困難を憶えられなさるのでしょう。母の日は、子供らがその母に、公に心の感謝を示すことの出来る日、またその方法を与える日です。これは私にとって、この日の最も重要な目的であります。...

私達の偉大なる模範としてキリストをみるとき、私達はキリスト様がその肉の母マリヤに対して、いかにも優しいそして天的な心やりを思いなさったかを見ます。美しい絵です。神の愛と母の愛は相似たるものであります。私たちは聖所においてこれを連絡するに躊躇する必要はありません。私たちが成人し、遠く家をはなれてからでも、母の祈りはどれだけ私たちに必要なことでしょう。このことは永遠までもはかり知られぬことです。それゆえに今私たちは、神よ世界の母達を祝し給えと真実に祈ることが出来ます。...」

ミス・モークは、本当に母を愛した。この母が若くして、その夫を失って後、その後長くやもめとして暮らしたが、それぞれ成人した子供たちによって晩年は平和な楽しい生活であった。

ムーディ

ミス・モークの心をとらえてはなさなかったのは、なんといってもムーディ・バイブル・インスティテュートでの聖書の勉強であろう。彼女が、世界に名高いこのインスティテュートに入った時には、もうムーディは天に召された(1899年)後で、ミス・モークの入学の時にはもう約15年もたっている。

ムーディの説教は単純でわかりやすく、しかも確信に満ち、きつき鋭いものであった。聖霊によらなければこのようなことはあり得ない。彼は個々の人に対して熱烈な同情を持ち、個人個人の魂の奥深くを洞察する力を持っていた。そして一人びとりを愛と実際的方法を持ってひきつけた。彼の霊はふしぎな大きさと甘美さをもっており、一人びとりの魂を救いに導こうとするやきつくす火のような情熱があって、これが彼に宗教家としての独自の立場を与えたのである。以上、ムーディについていわれる言葉は、そのまま、われわれのミス・モークについても言われうるものである。...

ミス・モークのムーディ・バイブル・インスティテュート在学は必ずしも長くなかった。彼女は、いわゆる学問として聖書学をやったというより、ムーディでは、その創設者の精神をくみとったとみてよいであろう。だからムーディでは、せいぜい、2年ぐらいではなかったかと考えられる。

ミス・モークは、(日本へ宣教師として召されることを)母に手紙を書いた。彼女はやがて母から返事を受けた。彼女はこの時のことをよく、わたしたちに語ったものである。その返事は次のような内容であった。

「わたしはあなたの手紙をうけとって、別に驚きませんでした。この日のあることを予期していたからです。あなたは幼いとき、すでに神様にささげられた人です。神様のお召しに対しては従順に従いなさい。それが私達のなし得る全部です。わたしは老年になってあなたを遠くに手ばなすのは、本当に淋しいことです。しかし、神様

のおぼし召しが第1です。何もかもささげてお従いしなさい。」

ミス・モークは、1914年12月29日、来日、伝道女学校（後に東京聖書学校、東京聖經女学院）で教えた。

1917年になると、小石川福音教会のミス・モーク・バイブル・クラスは火を噴出した。1917年10月、今西（後の小西）芳之助は、10月、同じ一高生・中野勇に紹介されて、ミス・モークを訪れたのである。後日、小西芳之助は、「あの時、自分は、自分は英語をならいたいためにミス・モークを訪れたのである。しかし、まんまと、ミス・モークの人格に圧倒された。いやキリストにつかまえられた。」といている。

1918年5月、小石川福音教会（小石川白山教会）は、新会堂建築を完成し、特別伝道が開かれた。講師は、東洋宣教会・日本ホーリネス教会の中田重次であった。

中田重次の熱弁は、まさに聖霊によるものであった。罪を責め、キリストの十字架を説き、聖霊のきよめに及ぶという炎の舌であった。今西芳之助などの大学生が、全く酔わされる思いであった。今西芳之助の受洗は6月2日であった。

産みおとされた子たち

ミス・モークのバイブルクラスは、1920年(大正9年)を迎えるとさらに前進することになった。それは第一高等学校生広野捨二郎が加わったことによる。広野捨二郎は、同窓の今西芳之助の紹介によるものである。

今西芳之助に連れられて、1920年6月20日、広野はミス・モークを訪ねた。その日のことが、広野の伝記『魂を追う人』（加藤恭亮著）に出ている。

「6月20日、祈祷会のある夜　始まる少し前に　越え難いしきいを初めて越えた。　小石川福音教会である。

今西のぶっきら棒な紹介の言葉から始まる。「モーク先生、これは僕と同室の広野です。広野は罪人です。しかし救ってほしいと言っと

ります。非常に煩悶しとりますが、どうか救ってやってください」
...友人がそばにいるから話しにくいのだろうと、ミス・モークは、
祈祷会までに少し間があるのを幸い、彼だけを自分の室につれてい
った。...

「ミスター・ヒロノ。イエス・キリストを信じるならば、きっと平
安と喜びを見出します。私はあなたのため全力をつくします。

(If you believe Jesus Christ , you will surely find peace and joy ,
I will do the best for you.)

これが彼女の最初の言葉だった。

「私のような罪深い者でも、キリストを信じて救われませんか」

「罪深い者と意識する人ほど、よけい救われるものなのです」

「すみません、今の言葉をもう一度」

ミス・モークは同じ言葉をくりかえした。...そう云った彼女は、静
かに立ちあがって、英和文対照の聖書を持ってきて「この聖書をあ
なたに差しあげましょう。今のあなたの問題を解くために、ここと
ここを、特別によく読んで下さい」...

「バイブル・クラスにも、祈祷会にも、そして日曜日の礼拝にはむ
ろんのこと、なるべくどの集会にもおいで下さい。きっと神さまの
ことがよくわかるようになりますから」

この最後の言葉を、広野は、終生、忠実に守った。

広野は、その年、東大に入り、なお深刻な悩みと求道を続けたが、
8月の終りのある日、ミス・モークは未明にたたき起こされた。広野
である。

「先生、昨夜聖書を読み祈っていると、突然、天来の光を与えら
れ、神の救いをいただいたことを知りました。何とうれしいことで
しょう」

その年の10月3日にはもうバプテスマを受けている。受洗者は万
木源次郎牧師である。...

(伝記の作者藤田昌直も1922年1月バプテスマを受けた。)

(藤田昌直が)洗礼を受けるや彼女のインビテーション・カードがき

た。バイブル・クラスへの招待である。

その時のバイブルクラスには多くの人がいた。ことに毎週月曜午後 3 時からの会は魅力であった。今西、広野、笹垣、神原、中野その他の東大組もいれば、篠崎、栗野、といった早稲田組もいる。長谷川進一、設楽享、蟻川等の慶応組もいる。長島（外語）、斎藤清（高師）天野英夫（後に東大）、田中実、鈴木英雄という荒武者、湯谷俊美と大沢栄一郎（東京高商）、もう一人の神原、万木鐘次郎、5 月には東大の石館守三、ここには割愛されているなお多くの青年。ミス・モークはその一人一人について全くゆきとどいた配慮をした。青年たちは、ミス・モークの前では、全然、子供のようにだった。母をとりまく子供たちのように、彼女をとりまいて、彼女の話を書いた。

（広野捨次郎は、1926 年、東京・本所教会（本所緑星教会）の牧師に任命された。長谷川進一（ジャパン・タイムス取締役）は神道のかちかちの信者の父をキリスト教に導いた。藤田昌直は、伝道者の道を選び、小石川白山教会の牧師となった。）ミス・モークは、これらの献身者の出た事をことのほか喜んだ。この年（1924 年）は、石館守三が小石川福音教会でバプテスマを万木牧師より受領した。この石館は、やがて東京大学教授となり、ビタカンファアの発見者として世界的な学者になったが、この若き日のミス・モークの感化が忘れられず、第 2 次大戦後、自宅を教会にし、邸内に会堂を作り、全く、伝道者と同じような仕事を始めて今日に至っている。この年小田俊夫が献身を言い表して植村正久の校長である東京神学社に入った。

この時期は、ミス・モークとそのバイブル・クラスにとっては、一つの歴史を画する時期であった。あたかも活火山帯の爆発をみるようであった。